

Peace

秋・冬の催し物の案内



### 歴史散策

#### 第18回地域歴史散策

#### 旧飯島村と長沼村を歩く

旧村域に残る古道を通りながら、古代から江戸時代の歴史を紹介。

- ◇日時：令和4年11月26日(土) 9時00分～15時
- ◇集合：神奈中笠間十字路バス停前(八景方面)(集合)
- ◇対象：中学生以上(健脚向きです)
- ◇人数：25人(応募者多数時は抽選)
- ◇費用：500円(資料・保険代)
- ◇申込：FAXか往復はがきに行事名「地域歴史散策18」・住所・氏名(ふりがな)・連絡先(FAXの場合はFAX番号も記入)・申込人数・「埋文よこはま」45を見た旨を記載し、埋蔵文化財センターへ
- ◇募集期間：令和4年10月15日(土)～11月15日(火)必着

### 本の販売

#### 「シリーズ 横浜の遺跡」

- vol.1 舞岡熊之堂遺跡 刊行済み
- vol.2 野島貝塚 今年度刊行予定

横浜市内の遺跡を紹介するブックレットをシリーズで刊行します。シリーズ第1冊目は横浜の戦争遺跡です。戸塚区にあった太平洋戦争末期の照空隊陣地を発掘した内容を、カラー版小冊子にし、わかりやすくまとめました。

#### 販売先：【館内に販売】

横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター、横浜市歴史博物館、横浜市三殿台考古館、横浜開港資料館、横浜市発掘記念館・横浜ユースラリア文化館

#### 【通販】

横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センターのホームページ

価格：1,000円(税込)

vol.3～は次年度以降に刊行予定



vol.1 舞岡熊之堂遺跡でみつかった戦争遺構の映像を右記QRコードよりご覧になれます。



### 展示(予告)

#### 来春の展示のお知らせ 「舞岡熊之堂遺跡」(2023年5月頃予定)

今年8月～9月にかけて開催した遺跡展で横浜市戸塚区舞岡熊之堂遺跡の照空隊陣地跡及び当時の照空隊の実態に迫る展示を行いました。遺跡からは他にも縄文時代や弥生時代の集落跡など、多くの遺構が見つかっています。

それらを含んだ、舞岡熊之堂遺跡の全体を紹介する展示を、来年の5月頃に横浜市歴史博物館で展示する予定になっています。

詳しくは後日HPなどで紹介します。

### 散策マップ(予告)

#### 散策マップ配布のお知らせ

配布先：埋文センター、周辺施設、HPなど

当埋文センターは横浜の南部、鎌倉にほど近いところにあります。鎌倉を囲う山の尾根道はハイキングコースとなっており、埋文センターからのアクセスも良好です。是非皆さんに埋文センターとその周辺を散策していただき、この度「埋文センター周辺map」を作成することとなりました(現在、作成中)。

埋文センターをお立ち寄りの際は是非、手に取っていただき、周辺を歩いてみてください。ハイキングコース周辺には、「埋文よこはま」38号で特集した「やぐら」や44号で特集した「石塔類」がみられます。

map



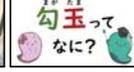
#### 「平和のために知る」こと

昨今、暗いニュースばかり飛び込んでくるように感じます。戦後77年を迎える日本にとって、戦争ははる分昔のことに感じている人もいるかもしれませんが、世界に目を向ければ、まだ現実社会に戦争を生きている人も多くいます。

日本にもかつてあった戦争という暗い歴史の遺構や遺物はそこに残っています。横浜市内でも、地中であつたり、何かで覆われた地上に、そうしたモノは実はまだ残っています。昨今は横須賀市などをはじめ、神奈川県内でもこうした戦争関連の遺構を積極的に公開する事例も増えてきました。本誌を通して、身近に感じる戦争関連の遺跡について改めて考えるきっかけになっていただければ幸いです。

編集N

YouTube チャンネルも開設しています



twitter #Yokohama\_Maibunで検索

登録してね

### 埋蔵文化財センターのご案内

#### 利用案内

平日：9～17時(イベント時を除く)

(団体利用：事前申込) ※学区郷土資料室併設

#### アクセス

##### JR 根岸線「港南台」駅

2番バス乗り場より神奈中バス「上郷ネオポリス」行きまたは「栄アール」行きに乗り、「上郷ネオポリス」下車徒歩1分

##### 京浜急行線「金沢八景」駅

金沢八景駅前3番乗り場より「上郷ネオポリス」行き、終点「上郷ネオポリス」下車徒歩1分または神奈中バス「大船駅」行きに乗り、「長倉町」下車徒歩7分

##### JR線「大船」駅

3番乗り場より神奈中バス「金沢八景駅」行きに乗り、「長倉町」下車徒歩7分



公益財団法人 横浜市ふるさと歴史財団  
埋蔵文化財センター  
〒247-0024 横浜市栄区野七里 2-3-1  
TEL. 045-890-1155 / FAX. 045-891-1551  
https://www.rekihaku.city.yokohama.jp/maibun/

### 埋文よこはま 45

発行日 2022年10月31日

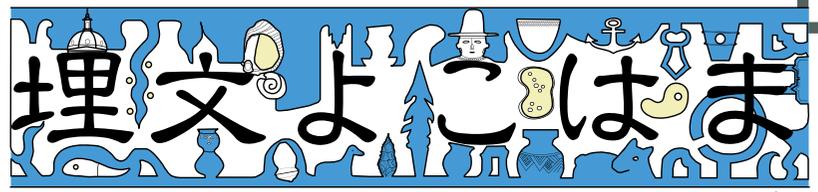
編集・発行 (公財)横浜市ふるさと歴史財団  
埋蔵文化財センター

印刷 株式会社ナデック

「埋文よこはま」は横浜市内で発掘調査された遺跡や出土した遺物を紹介する広報紙です。

市内の学校・図書館・区役所などで入手することができます。

バックナンバーについては埋文センターHPからもダウンロードが可能です。

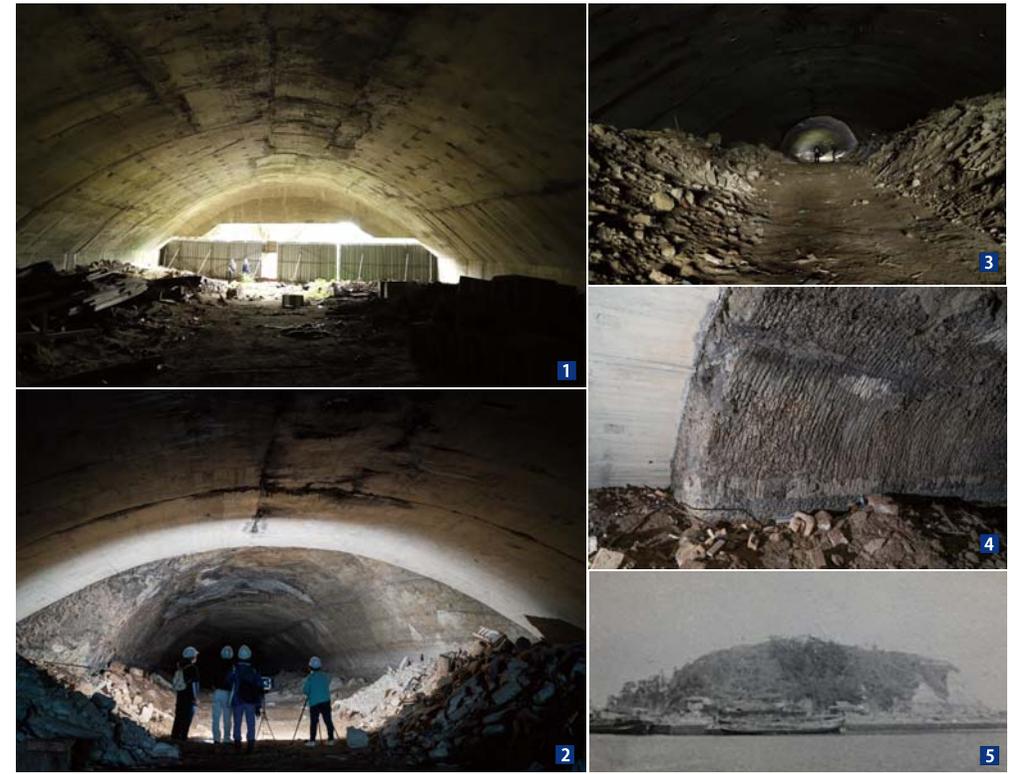


## 横浜の戦争遺跡

45

特大号

### 野島の掩体壕(飛行機格納用大型隧道)



日本には太平洋戦争を物語る様々な建物が現存します。神奈川県内にも、海軍の主な拠点であった横須賀・横浜・藤沢・厚木、陸軍の主な拠点であった相模原・座間などを中心に、多くの軍事施設がかつて存在しました。横浜市内にも戦争を物語る遺構が残り、特に横須賀に隣接する金沢区をはじめ、戸塚区、栄区などの南部地域ではその立地条件から海軍の軍事施設だった遺構がみられます。その一つに野島の掩体壕があります。野島の掩体壕は軍の飛行機を格納するためのトンネル構造となり、掩体壕遺構としては国内最大級の規模を誇り、入口の幅20m以上、高さ約7m、全長260mを測ります。野島掩体壕は大戦末期の1945年(昭和20)に、横須賀海軍航空隊基地の航空機群を退避させるために日本海軍が造ったものです。

※1 多くの掩体壕は単機の飛行機格納庫であり、野島のような大型の隧道式格納庫ではない。野島の掩体壕を造った第三〇航空隊の戦時日誌中では「飛行機格納用大型隧道」との記載がみられる。ここでは一般的に使用されている「掩体壕」を使用しているが、( )で飛行機格納用大型隧道と記載した。

- 1～2 野島掩体壕(内側より)
- 3 野島の掩体壕にみられる掘鑿痕
- 4 野島(南方より)(赤星ノート昭和22・23撮影)
- 2・4 写真提供：東京文化財研究所
- 3 神奈川県教育委員会蔵
- 【撮影協力】
- 横浜市環境創造局南部公園緑地事務所
- 横浜市教育委員会

野島隧道は素掘りの夏島隧道と異なり、掘削後にコンクリート巻立てを行っている。上記写真の2の奥側に掘削のみの素掘りの状態、手前がコンクリート被覆の状態である。4の写真でもその境界部分を撮影した。

# 掩体壕 Bunker

掩体壕とは、飛行場に駐機する軍用機を上空の敵機から守るために作られた格納庫である。太平洋戦争末期、米軍による本土空襲が激しくなる中、全国の軍用飛行場に構築された。野島掩体壕は横須賀海軍航空基地の一部を担う飛行機の格納庫である。

掩体壕には、コンクリートの屋根がある有蓋型(P.31~q)と、屋根がなく爆風・破片除けの土堤のみの無蓋型がある。前者は土を饅頭状に盛り固め、その上に筵や紙、セメント袋などを敷き、鉄筋を置いてコンクリートを流し込み、コンクリートが固まると、中の土を掘り出して上に被せ、草木で偽装した。野島掩体壕は野島山の山体を貫通するトンネル状で、その工法は異なる。



## 野島掩体壕の築造法

野島掩体壕はトンネル状であるため、無蓋・有蓋掩体壕の築造方法と異なり、隧道や地下壕を造る工法と同様である。築造は掘り進める「掘鑿」と内部をコンクリートで覆うなどの掘削部仕上げ作業「覆工」がある。

野島掩体壕の築造には「Z<sub>2</sub>工法」という特殊な工法が用いられた。Z工法とは前線での耐弾施設の急速施工法として考案されたもので、地下及び半地下施設に應用された。一般的にはZ<sub>1</sub>~Z<sub>7</sub>工法まであり、例えばZ<sub>2</sub>工法は爆力によるセメント注入を應用した急速隧道及び地下施設施工法である。

第三〇〇設営隊長の山本将雄技術大尉は株式会社利根ボーリングと「長孔穿孔型試錐機」を共同開発し、これを使用して径10~15cmの長い穴を地上から一気に掘り、地

下壕の壁と型枠の間にコンクリートを流し込むZ<sub>2</sub>工法で工期の短縮を図った。実験工事後、本工事としては野島掩体壕に使用され、さらに横浜市港北区日吉台の連合艦隊司令部、東京都港区高松宮殿下高輪御殿の地下壕を建設、長野市松代大本営に対応した海軍側主脳部壕も建設着手していた。

『海軍施設系技術官の記録』中の山本による投書によれば、「野島を西北より東南に貫通して主滑走路に直結するスパン二六米（“銀河”の翼長二四米に準じたもの）長二五〇米の“日本一”の大型隧道の完成に海軍一の装備機械力と全兵力を投入、更に予科練の少年航空兵一千名の応援を待て終戦の前日、即八月十四日に完成した」とあり大規模な工事であったことがわかる。

当時一般的だった「場所打「コンクリート」」では一か所ずつ型をくみ、コンクリートが固まったらまた次の場所に移動して型をくむという時間のかかる工法だった。コンクリートブロックを積み、モルタルでつなぐ「コンクリート」塊積も同様であった。これに対し、野島の築造工法は戦争末期の最新技術をもって5か月という短期間で築造されたのである（P.4-5参照）。



〈野島掩体壕と追浜飛行場〉写真中央の島が野島、下部には追浜の飛行場が見える。左写真は1944年10月14日に、右写真は1946年2月15日に撮影されたものである。右写真では野島から追浜へ、水路を埋め立てて道が造成されているのが確認できる。幅の広い道の下には野島の掩体壕があり、格納された飛行機を追浜の飛行場へ移動させるための道と想定される。

01

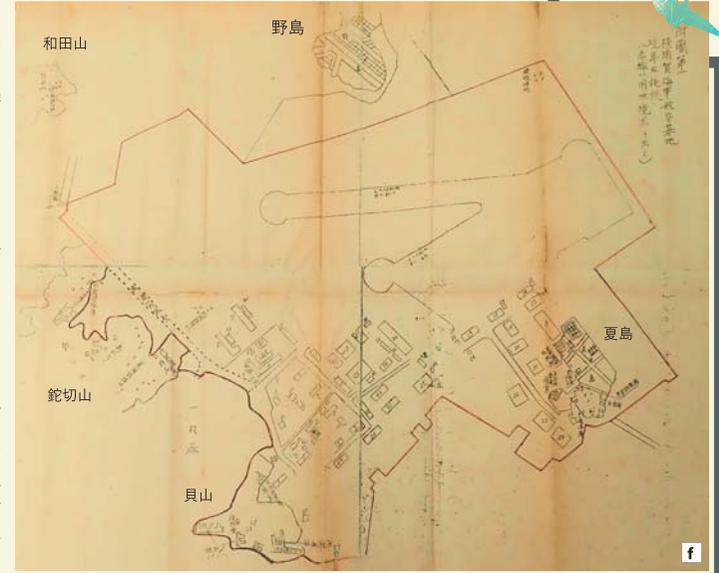
横須賀海軍航空基地  
野島掩体壕

## 横須賀海軍航空基地

大正5年4月1日、帝国海軍初の航空隊として横須賀海軍航空隊が設立し、横須賀鎮守府の防空、航空隊要員の教育・練成、新型機の実用実験、各機種の戦技研究などを担った。昭和19年からは実戦配備にもつき、この頃から、空襲対策として施設の地下化が始まり、横須賀海軍航空基地を囲う野島、夏島、貝山、鉦切山の丘陵部には網の目のように地下壕が掘られ、飛行機や弾薬、燃料、物資などが格納された（f）。現在、跡地の大部分が日産自動車追浜工場である（k）。

## 夏島地下壕跡

夏島には3層構造の地下壕が建設され、第1層地下壕群中に飛行機格納用の大型隧道がある（g）。第2層は標高20m付近に（h）、第3層は標高42m付近に坑口が存在する。第1層には軍事物資の倉庫や食糧備蓄庫、爆弾庫等が設けられ、第2、3層の詳細は不明だが、第3層は規模も小さく、交通路に敷設された人員退避壕とも考えられている。



f 引渡し施設目録 横須賀海軍航空基地  
g 夏島飛行機格納用大型隧道（第1層）  
h 夏島地下壕（第2層坑口）  
i 横須賀海軍航空基地  
j 貝山地下壕の内部の様子  
k 金沢山（前名寺市民の森・八角堂広場）より、海の公園方面を望む  
防衛研究所戦史研究センター所蔵  
g-h-j 写真提供：横須賀市教育委員会  
i 写真提供：渡辺洋二

## 掩体壕は使われたのか？

野島掩体壕は飛行機40機を格納する予定だったが、終戦により実際に使用されることはなかった。掩体壕としては使用されずに終戦を迎えたが、壕の奥にはトンネルが掘りめぐらされ、防空壕を兼ねた兵員の居室として使用していたという記述がみられる（P.3 上図の野島見通し図参照）。八畳間にベッドやタンスが置いてあったという。また倉庫には食料品等の物資が多量に貯蔵されており、敗戦が決まると、多くの物資が持ち運び出された。

a~c 野島掩体壕の築造【第三〇〇設営隊戦時誌より】  
d 第三〇〇設営隊戦時誌（写真は設営隊長山本将雄大尉）  
e 野島空壕  
a-d 防衛研究所戦史研究センター所蔵 e 国土地理院Websiteより

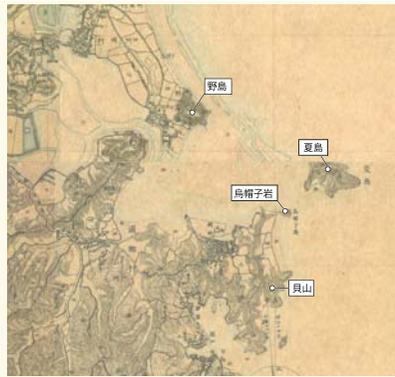


有蓋型  
周辺の掩体壕  
l-m 旧陸軍調飛行場  
白糸台掩体壕  
（東京都府中市）  
n-o 旧陸軍調飛行場  
大沢第1掩体壕  
（東京都三鷹市）  
p 旧茂原海軍航空隊  
第3号掩体壕  
（千葉県茂原市）  
q 旧茂原海軍航空隊  
掩体壕内部（Z5工法）  
土砂を壕の形に盛り填圧し、筵や板を並べた上に鉄網等を張り、セメントを流して築造した様相がわかる

茂原海軍航空隊掩体壕群はZ<sub>2</sub>、Z<sub>3</sub>工法で造られた。中型の掩体壕はZ<sub>2</sub>、小型の掩体号はZ<sub>3</sub>の工法で造営されるが、茂原掩体壕群の最大規模を誇る第3号掩体号はZ<sub>2</sub>工法で造営されている。Z<sub>2</sub>工法とは別名土饅頭工法と言い、土饅頭を築きそれを体心とし鉄網コンクリートを打設して固まると内部の土を掘りだし、その土を覆土に利用するものである。これに対しZ<sub>3</sub>工法は特殊型枠を巧みに應用した鉄網コンクリート施工方法である。

# 横須賀軍港と金沢区

Relationship between Yokosuka Military Port and Kanazawa Ward, Yokohama City



明治前期測量2万分の1フランス式彩色地図に一部加筆

前頁の野島をはじめ、金沢区は横須賀海軍施設の一部を担ったわけだが、そこに至る経緯を歴史から少し振り返ってみよう。

1846年(弘化3)、アメリカ東インド艦隊が浦賀沖に姿を現すと、幕府は江戸湾警固の体制をとり、同時に造船施設の必要性からフランス人技師の指導による横須賀製鉄所の建設に着手する。明治政府は江戸幕府の横須賀製鉄所を継承し、艦艇を建造する横須賀海軍工廠へと発展させる。海軍は横須賀に鎮守府(5頁参照)を置き、陸軍もまた東京湾防衛のため東京湾要塞(11頁参照)を編成し、横須賀に司令部を置く。横須賀には陸海軍の施設や部隊が集中していく。また、明治期の金沢は「金沢八景」と「海軍の街、横須賀」とのセットの観光ルートが確立し、交通路が整備される。



横須賀製鉄所出土のレンガ 横須賀市教育委員会所蔵

東京、横浜、横須賀軍港を結ぶ航路・国道・鉄道など近代的交通体系が構築される。

1912年(明治45)、海軍航空技術研究委員会が追浜で飛行機の実験を始めると、追浜地先は埋め立てられ、烏帽子岩が姿を消し、夏島と陸続きになる。一方で金沢区北部の富岡地域は明治初期から横浜近郊の別荘地帯として発展、この別荘文化は海沿いに南下して金沢まで伸び、平潟湾内は別荘分譲計画として埋立られるが、実際は一帯を一括して海軍が買上げた。

1916年(大正5)に海軍航空隊令が制定されると日本海軍初の航空隊となる横須賀航空隊が追浜飛行場に設立される。富岡には横浜航空隊が1936年(昭和11)に設立され、金沢区周辺には横須賀航空隊、横浜航空隊(後の八〇一航空隊)、追浜航空隊、田浦航空隊の4つの航空隊が展開した。1932年(昭和7)には横須賀軍港境界改正で、金沢町野島南部が横須賀軍港用地に組み込まれる。同年、追浜に海軍航空廠(後に海軍航空技術廠・第一海軍技術廠と改称。以下、空技廠の略称)が開廠すると、試験研究の成果を実用化するため、多くの軍需関係産業が金沢にくる。関東大震災による経済的な損失の大

きかった富岡は軍需工場の展開や横浜航空隊の設立により横須賀の経済圏に組み込まれていく。

海軍の中で航空機の重要性が認識されると、空技廠は拡張し、室ノ木工場の建設や釜利谷・大川に支廠や工具宿舎を建設する。支廠敷地内には電波・音波を専門とした第二海軍技術廠が設立され、さらに野島や平潟湾南岸(現在の関東学院周辺)にも空技廠の様々な実験施設が造られた。こうして金沢区そして栄区等の横浜南部地域は横須賀を中心とする軍都・軍郷地域となっていく。



烏帽子岩の跡碑

## 鎮守府と横浜

鎮守府とは海軍の根拠地として、艦隊の後方を統括する機関である。所管の海域の防備や所属艦艇の統率・補給・整備、兵員の徴募・訓練、施設の運営・監督などにあたる。

1871年(明治3)、「海軍規則」で「附近ノ諸港ヲ統括」する「海軍提督府」の条項が設けられ、翌年に発令、日本周辺海域を東西2海面に分け、各指揮官下に置いた。1876年(明治9)には「提督府」を「鎮守府」とし、「東海鎮守府」を横須賀に、「西海鎮守府」を長崎に置くことが決定したが、東海鎮守府のみ横浜に設置された。

この東海鎮守府は中区北仲通6丁目のドイツ領事館跡に設置され、紀州潮ノ岬以東、北海道までの広域的な海上を管轄した。東海鎮守府の隣にあった灯台局はのちに航路標識管理所となるが、この建物基礎が発掘調査で検出した(下図と写真)。東海鎮守府には明治天皇をはじめ様々な要人が上陸したりここから艦船に乗り込んだ。1884年(明治17)には東海鎮守府は横須賀に移転し「横須賀鎮守府」と改称、横浜の東海鎮守府跡地には伊勢山離宮(横浜御用邸)が移転してきた。

1886年には、日本沿岸海面を5海軍区に分け、各区に鎮守府と軍港の設置を定めた。鎮守府はフランス海軍模範制度のため、フランスに倣い5か所設置することとなり、横須賀のほかに、1889年に呉(南海)と佐世保(西海)、1901年に舞鶴に鎮守府を開庁した。当初予定の室蘭(北海)の設置は取り止めとなり、大湊を軍港よりも格下の要港とし、鎮守府よりも格下の要港部を設置した。

横須賀に鎮守府が設置されると、横須賀造船所は鎮守府に属し、造船所以外の機能も拡大し、艦隊の受け入れ増加や、機関学校や技術者養成所、教育機関が新設された。1916年には追浜に横須賀海軍航空隊が造られ、1932年に海軍航空廠ができたこと、飛行機開発も最初は横須賀が中心であった。追浜から金沢文庫にあった工場で、海軍の飛行機関係のノウハウが確立され、全国に伝えられた。

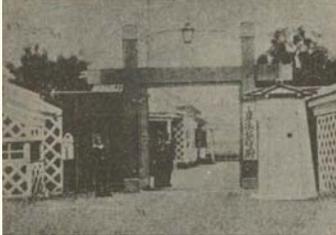


洲千島遺跡 19号建物基礎(航路標識管理所) (南東より) ※現在、横浜市庁舎が建つ



「横浜実測図」明治14(1881年) 内務省地理局測量課作成

上:北ドイツ連邦公使館 1865年(慶應元)頃完成。横浜開港資料館所蔵



地図右側に東海鎮守府の文字が見える。その西隣には燈台局の文字も見える。左の写真がその航路標識管理所の基礎遺構。以下のような建物変遷がある。

※洲千島弁天社→燈明台役所→灯台寮→航路標識管理所 ※プロイセン領事館→東海鎮守府→御用邸

1865 慶應元		1871 明治4		1876 明治9		1889 明治22		1923 大正12		1942 昭和17		1944 昭和19		1945 昭和20									
横須賀製鉄所着工	横須賀造船所と改称	横浜に東海鎮守府設置	関東大震災	米軍戦機16機、日本本土初空襲																			
浦賀沖東インド艦隊出現																							
Yokohama Japan																							

※夏島陸道・野島陸道の工事は1945年3月15日以前にすでに横須賀海軍施設部第一部隊にて行われていたが、これを改編し、第三〇〇設管隊を開隊し、作業を開始させる。また夏島、野島の陸道掘削工事の完了に関しては、史料の残る6月30日時点で、野島の第一期工事は90%、第二期工事は25%(途中から1期、2期は並行)、夏島の第二期工事は65%が終了しており、予定では7月15日野島の60m区間、夏島の100m区間は終了させ、残りは8月末までに完成予定としている。ただし、隊員の日記の中に8月14日に野島の陸道掘削工事が終了したとの記載もみられる。

### 横浜南部に残る海軍遺構 金沢区

海軍航空技術廠は業務や施設の拡大に伴い、金沢区釜利谷に兵器部と爆弾部を主体とした支廠を設けた。本廠(横須賀市浦郷に所在)が航空機の機体や発動機を扱うのに対して、支廠は兵器部門として搭載兵器や爆弾の試作、研究、実験を行った。敷地の範囲は北は宮川から東は京急電鉄軌道、南と西は丘陵に囲まれ、約125㎡もの広大な敷地だった。この広大な敷地を取り囲むようにいくつもの海軍境界の石柱や標柱がたてられた。それらの境界石は現在も京急金沢八景駅や横浜市立大学、御伊勢山・権現山などの周辺に残る。

2016年に行った上行寺裏遺跡(瀬戸21番地やぐら群)調査の際に、やぐらの上部に海軍境界の石柱が見つかった。この場所は第一海軍技術廠支廠の南東端にあつた



150cm  
土に埋もれていた部分



a・b 海軍境界石柱  
【上行寺裏遺跡(瀬戸21番地やぐら群)】  
c 海軍工廠支廠  
【米軍写真M46-A-7-2】  
d 海軍境界石柱  
【御伊勢山・権現山】  
e 1号やぐら  
【上行寺裏遺跡(瀬戸21番地やぐら群)】

### やぐらと防空壕と岩質

横浜市南部には中世のやぐらと言われるお墓の一種が多くみられる。やぐらの中には戦時中、防空壕に転用されたものも多くみられる。戦火から逃れるだけでなく、戦火にあった家が再建されるまで、家財道具を持ち込むなどの利用もあったようである。防空壕として使用する場合、そのままの形状でなく、さらに奥に部屋を作るなどの改造した様子も伺える。

金沢区No.52遺跡(六浦二丁目所在やぐら)では、やぐらの脇に防空壕とみられる穴が造られていた。この辺りは「鎌倉石」とも呼ばれる凝灰岩がむき出しになった崖が多く、これらの加工しやすい岩を利用して、やぐらや防空壕が造られている。

鎌倉石とは三浦層群地層及び上総層群浦郷層の凝灰岩である。鎌倉市全域から逗子、横浜南部などにみられ、土木や建築用資材等として使われてきた。こうした自然的要因も、穴を掘る場合大きく関係する。

Point!  
野島掩体壕の工法と岩質

第三〇〇設営隊戦時日誌に「爆薬欠乏対策として液体酸素を粉末木炭に侵漬して実用中なり、横須賀地方の如き軟岩に対しては一般ダイナマイトに充分代用し得、但し容器及毎日の運搬の点より見て之が製造工場に近きを要す」とある。

三浦半島北部から横浜市域西部には上総層群が分布する。上総層群の一つ野島層は野島を模式地とする。スコリアや軽石を含む泥岩である。構成岩の掘削しやすさも建設に大きく関わる。

1997・98年に京急金沢八景駅西側に近接する丘陵一帯の調査を「金沢区No.52(上行寺裏遺跡)」として調査を行ったところ、海軍関連施設が見つかった。この付近は鎌倉との関連から「やぐら」をはじめとする中世遺構が多く検出されている。丘陵は東側に「権現山」、南西側に「御伊勢山」と称される2つのヒルトップがあり、調査は遺跡保存を目的とし、その範囲・性格等を明らかにするために行われた。その際に、御伊勢山では頂部に見張り台の基礎および貯水槽もしくは倉庫と思われるコンクリート製の施設、北東側の斜面では便所、さらに北側の尾根上からは高射機関銃の台座と考えられる施設の残骸が確認されている。

第一海軍技術廠支廠(P.6参照)では、昭和18年ごろから空襲対策として、敷地の西側から南側の丘陵部にいくつもの地下壕を掘削し、周囲の丘陵上に防空対策として横須賀警備隊所管の高角機銃陣地を構築している。1997・98年の調査で見つかった機銃の台座はこうした防衛施設の一部とみられる。支廠には25mm連装が6基、八景山には25mm連装が

2基備わっていたようである。八景山のこの防空砲台は1944年(昭和19)の横須賀海軍警備隊の傘下に置かれた第一高射機銃大隊下の第二高射機銃中隊の兵員17名が配置されたようである。

a 便所跡  
【御伊勢山北東斜面部のやぐらの北西側】  
b コンクリート基礎  
【30T拡張区】  
平坦に削平された頂部東側に東西約10m、南北10m以上の規模を有する。  
この施設の北西側にも6×4m程の貯水槽あるいは倉庫などと思われるコンクリート施設有。  
c 高射機銃座跡  
【御伊勢山から北に派生する尾根上中程】  
4穴一列の掘り込み  
2×2mの方形  
2m間隔で方形に配す



明治36年10月、富岡に初の飛行艇部隊として横浜航空隊(通称:浜空)が設立された。外洋偵察や哨戒行動が主な任務で、南洋諸島を主な活動域にしていた。現在は金沢区富岡総合公園となっているが、当時は敷地面積35㎡で根岸湾を水上飛行場の専有海面として飛行艇が離発着した。現在でも横浜海軍航空隊隊門の一部が公園内に残る。

〈今も残る軍港水道の痕跡〉

海軍航空技術廠は、現横浜市立大学、横浜市立金沢高校、東急車輛製造株式会社、旧東洋工、社宅などに至る広大な研究施設であった。そのため、水道使用量も膨大であった。また右写真に見るように、横須賀軍港水道関連とみられるものが横浜航空隊跡地の富岡総合公園内にも残存する。



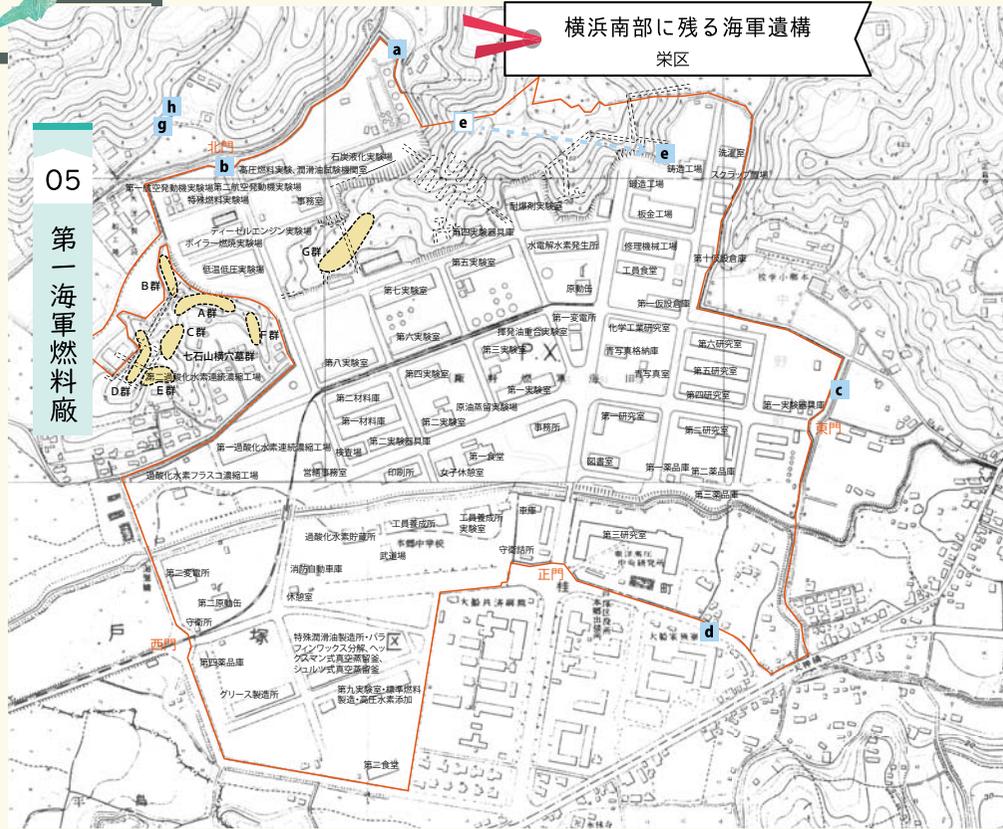
d 隊門  
e 浜空神社跡 飛行艇隊の守護として昭和13年鳥船神社が創建され、戦後、その跡地に戦没者慰霊に浜空神社が創建され、平成20年春まで鎮座していた。現在は遺跡の雷神社に遷座し、公園内には鎮魂のみがある。  
f・g・h 水道関連施設

## 横浜南部に残る海軍遺構

栄区

05

### 第一海軍燃料廠



左:大船PX遠景  
下:七石山横穴墓群のバラマ写真(調査時のA群)



#### 第一海軍燃料廠とは

燃料廠とは燃料の製造や研究を行う基地であり、第一海軍燃料廠は海軍で使用する燃料全般の基礎研究を行うため、栄区の本郷台地区に1938年創設された。小菅ヶ谷、公田、桂地区の約40haもの土地で、船舶や航空機の燃料潤滑油の研究、機械の設計、研究、工作などが行われた。また石油不足から代替燃料の開発が行われ、燃料廠松根油製造所が造られ、近隣住民は松の木から松根油を採取する作業に協力した。太平洋戦争末期にはロケット戦闘機「秋水」用の燃料である過酸化水素水製造施設やロケットエンジン燃焼実験室も設置された。

燃料廠ができると、追浜から金沢を経て、燃料廠前を通る道ができ、現在の環状4号線は瀬谷の弾薬庫まで続く軍用道路だった。また大船駅から燃料廠までは鉄道の引き込み線がひかれ、JR根岸線の一部は燃料廠専用の貨物線だった。

#### 第一海軍燃料廠のその後

燃料廠は敗戦と同時に、書類や液体燃料、薬品類は処理され、施設と残存する財産の管理は、海軍解体後は内務省が、その後は大蔵省が行い、現地では、国から委託された神奈川県が管理を担当した。部分的に行われた敷地や建物の払い下げ後は、しばらく遊休地として放置されていた。

1950年に勃発した朝鮮戦争により日本国内の米軍基地が再編・整備され、1951年に米軍に接収、極東エクステンジサービス本部(FEES)が設置された。FEES本部は横浜港に陸揚げされた米軍PX(売店)向商品の輸送・保管・配送を担当する組織であった。「大船PX」としての呼称が地元では定着していた。大船PXの返還は1964年から動きがあり、1967年には全面返還となる。この跡地利用を巡っては市、県、国がそれぞれ大きな興味を持ち、全面返還が達成されると再開計画が実施に移されていく。

#### 再開発と文化財

再開発とともに、新駅の設置と国鉄(現JR東日本)根岸線の延伸が進められていたところ、1967年6月に横浜郷土史会が古道踏査をしていた際に、現在の本郷台駅南側で、古墳時代終末期のお墓である横穴墓を発見する。しかしすでに遺跡地内に根岸線の敷設計画があったため、失われてしまうであろう横穴墓調査が七石山横穴墓群として、急遽、行われることとなった。数回の調査の結果、A~Gの7群100基以上(未確認や未調査を含む)の横穴墓から立つことが判明した。またA群は2段に展開し、下段が一般的な単室構造の横穴墓で構成され、上段部分には奥に小部屋を持つ棺室構造といわれているタイプが展開している。

現在、B群と呼ばれる12基の横穴墓が残されている。1988年には「七石山横穴古墳群」として横浜市の地域文化財に登録されている。

06

### 抵抗拠点陣地

横須賀海軍鎮守府特別陸戦隊

1944年、アメリカ軍はマリアナ沖海戦とサイパンの戦いにより戦争終結への道筋が見えてくると、日本本土侵攻への今後の戦争遂行における作戦のひとつとして認可した。関東への上陸作戦を「コロネット作戦」とし、上陸地点は湘南海岸(相模川沿いを中心に北進し、現相模原市・町田市域辺りより進路を東京都区部へ進行する計画予定)と九十九里浜から鹿島灘沿岸にかけての砂浜海岸が設定され、首都を挟撃することが予定されていた。上陸予定日はYデーと

呼ばれ、1946年3月1日が予定されていた。このうち主力は相模湾に上陸する第8軍でYデー初日に投入される兵力は後方支援要員も含めて301,104人と、九十九里浜に上陸する第1軍の241,326人を上回っていた。

日本軍は、アメリカ軍がこの作戦によって、環状4号線を使用し、大船方面から東京に攻め入ると予想し、1945年初頭から道路に沿うようにして迎撃できるような態勢をつくった。それが特別陸戦隊として、横須賀海軍鎮守府の陸上戦闘を専門とする海軍部隊で、臨時に編成された。

昭和20年3月27日には『軍事特別措置法』により、沿岸地域の民有地に部隊の宿舎や陣地の構築、道路開設、森林伐採などが軍の命令で行われることになった。

栄区の道沿いには今でも、壕や銃眼を有する洞窟式の陣地がみられる。一見すると防空壕のように見えるが、入り口をコンクリートで塞いで銃口だけを出せるような施設が確認できるものも

ある。なかには、周囲に奥行のない矩形の窪みもみられることから、中世のやぐらを転用した可能性のあるものもみられる。地域の人の話のなかには、突然軍隊がやってきて穴を掘り、3交代24時間で作業していたなどの記述も見られる。



栄区上郷町にみられる壕防空壕か地下壕かは不明

1953年地図「小菅ヶ谷」と1968年修正地図「桂町」をベースに「第一海軍燃料廠とその周辺の戦争遺跡」掲載の施設名称を元にして作成しています



- a** 外壁【信光社北側】  
信光社は海軍燃料廠化工機部の実験棟の払い下げを受ける
- b** 北門【栄第一水再生センター】  
信光社の工場敷地を仕切る壁と一体化
- c** 外壁(第二研究室東側)  
【柏陽高校敷地】  
柏陽高校敷地は第一・第二研究室の建物を使用、体育館は旧燃料廠の実験棟(倉庫)を使用
- d** 外壁(正門東側)  
【栄区役所南側・本郷公園付近】  
一部のみだが、第三研究室南側外壁にあたる部分が残存
- e** 境界石柱  
【小菅ヶ谷石神公園】  
現在の場所は移設したもの、本来は本郷台和田道跡 **e** にあった。
- f** 引き込み線跡  
【大船駅】
- g-h** 防空壕  
【追上坂】  
燃料廠北側外区に位置する。燃料廠で働く人員の避難用壕か。
- i** 第一海軍燃料廠機械油用瓶  
個人蔵

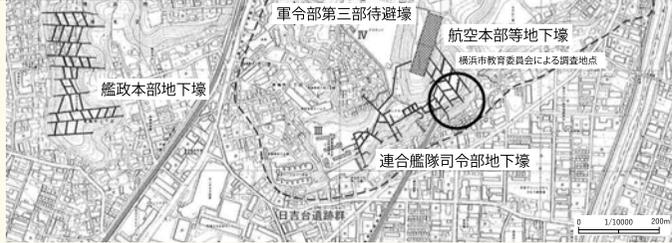


栄区公田町にみられる機銃銃座



鶴見川の北岸と矢上川に挟まれた、慶應義塾日吉キャンパスがのる日吉台と通称される台地の南側崖線の斜面部から低地にかけて、アジア・太平洋戦争末期に帝国海軍及び海軍省がその中心的な役割を移した地下壕が点在する。海軍省人事局地下壕・軍令部第三部退避壕・連合艦隊司令部地下壕、艦政本部地下壕などである。

なかでも慶應義塾日吉キャンパスにある旧日本海軍連合艦隊司令部の地下壕については耳にした方も多いだろう。連合艦隊とは複数の艦船から成る艦隊であり、その指揮統率を行う組織が連合艦隊司令部である。日清・日露戦争以来、司令部は洋上の艦隊に置かれ、戦域の拡大と共に、1944年4月には東京近海に定位置を定め必要に応じて移動して



横浜に残る海軍遺構 港北区

いたが、戦況の悪化とともに、使用可能な艦船は前線で利用すべきとの意見や大所帯の司令部が戦艦1隻にはおさまらなかったこと等の理由から、より広い陸上移転が決まり、1944年9月には日吉へ移転した。

戦後、軍事施設はアメリカ軍を中心とする連合国軍に接収されたが、サンフランシスコ講和条約発効後は民間に払い下げら

れたり、大学施設に転用されたり、解体されたりと様々であった。日吉一帯の地下壕は危険防止のため、一部は埋め戻されているが、連合艦隊司令部が置かれた地下壕は慶應義塾日吉キャンパス内にあり、ほぼ、当時のまま残っている。

日吉台一帯の地下壕は四地区で延長約4km以上、16.5haにも達したといわれ、慶應義塾によって発掘調査が行われているほか、横浜市教育委員会でも立ち合い調査をおこなっている。

横浜市による調査地点付近は、航空本部等の地下壕の南側出入りに係る諸施設が構築され、沈殿槽や土管列、地下壕出入口施設などの遺構が検出されている。入口施設の形態は連合艦隊司令部地下壕や海軍省人事局地下壕でみられるようなコンクリート構造体がY字やT字をなすように造られているのではなく直線的に開口する形状である。この奥に続く地下壕はヴォールト天井の坑道で、天井や壁はコンクリートで覆われている。内部にはコンクリート打設時の型枠痕が残る。坑道底面はコンクリートモルタルの舗装面で、両側に側溝が設けられている。舗装面の下部は踏み固められ、土丹が敷かれ、その土丹層を掘り込んで通路方向の中央部に土管が埋設されている。舗装面北側付近からはスコップが出土しており、出土状況から地下壕構築時前後に使用したとみられる。

- a 航空本部等地下壕 2a出入口全景 【航空本部など】 慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室提供
- b,c 地下壕坑道 【航空本部】
- d 地下壕出入口部 【航空本部】
- e 東沈殿槽 【航空本部】
- f スコップ 【航空本部】
- g 土管 【航空本部】

b~g 横浜市教育委員会提供



横浜のその他の区に残る海軍遺構

海軍病院と横浜と伝染病

右記の戸塚海軍病院の伝染病棟には、結核や赤痢、チフス、マラリア等の伝染病患者を200人ほど収容していたという。

横浜などの開港場は感染症の脅威と早くから戦ってきた。山手の外国人墓地のイギリス記念碑周囲の多くの駐屯軍将兵墓標は、戦死者ではなく、保養のために香港から移動してきた病兵のものである。天然痘、コレラ、赤痢などに多数の兵士がかかり、医療施設の整備は不可避であった。

1864年(元治元)、イギリスがアメリカに貸与された領事館用の山手の土地を借り陸軍病院を設け、同年には海軍附属病院として瘧疾院も設けた。フランスも海軍病院を設立し、その後もオランダ、アメリカ、ドイツなど各国が海軍病院を設立させた。

旧アメリカ海軍病院は、東洋艦隊のための医療施設として1872年(明治5)に建設された。発掘調査によって、1909年(明治42)に建て替えられた2代目の建物の基礎が検出されて

いる。下田菊太郎設計によるコロニアル様式の2階建て建物で、1923年の関東大震災で倒壊した。

その後も横浜には多くの病院が建設された。こうした医療施設の整備はインフラ整備にも大きく関わり、外国人居留地先行ではあったが、明治維新後は日本側が外国人技術者の協力を得て、整備工事を実施した。

歴史では戦争によって伝染病が大流行した例が多くみられ、日清戦争では兵器による負傷からの死よりも病死者の方が多かったという。また日露戦争では感染症対策を行っていたが、第2次大戦の時の日本軍は、太平洋の島々での戦いに当たり、マリアリア予防などの感染症対策を十分に行わなかったとの指摘もある。



旧アメリカ海軍病院 横浜開港資料館所蔵



旧アメリカ海軍病院の建物基礎 横浜市教育委員会提供

港北区内では日吉の地下壕の他にも軍事関連の痕跡がある。大倉精神文化研究所本館(現大倉山記念館)には1944年9月に海軍気象部が移動してきた。海軍気象部は1944年4月に海軍省水路部から分離独立した機関となり、9月には気象部員約100人が大倉山の建物に移ってきたのである。気象部は海霧の研究と当時の敵国の米国とソ連の気象電文の暗号解読をしていた。これは、研究所が高台にあり、電波が受信しやすかったことも理由の一つにあったという。



大倉山精神文化研究所

1943年(昭和18)、戸塚区原宿町に戸塚海軍病院が開設され、ここに東京都築地にあった海軍軍医学校戸塚分校が新設された。

海軍の医務、衛生関係士官の教育は各海軍病院練習部があった。戦争拡大で要員採用が増え教育施設が不足したため戸塚海軍病院に軍医学校の分校を併設し、翌年戸塚衛生学校として分離した。医歯薬学を学んできた学生が繰り上げ卒業前に入学し、6か月の士官教育を受けた。場所は追浜飛行場から第2海軍航空瀬瀬谷補給工場までをつなぐ現環状4号線・海軍道路の道沿いにあり、現在国立病院機構横浜医療センターとなっている。

ここに勤務していた五十嵐春江氏の記録からは、終戦前年の1944年4月の時点でも、木材が山積みされ、仮庁舎であったというし

かし、建設中の仮病舎にはすでに1000人を収容していたという。

1945年2月15日には病院周辺がB29による爆撃を受ける。病院に併設した練習部(のちに衛生学校)に爆弾が落下し、「数十名の死傷者」が出たという。



海軍軍医学校戸塚分校の碑

碑は数年前まで国道1号沿いの釣貝店駐車場にあったが、現在横浜医療センターに移設

Point!

一般的に「戦争遺跡」とは第2次世界大戦の時代を中心とする戦争に係わる遺跡であり、「戦跡考古学」は考古学的方法論によって戦争遺跡を対象とする研究領域であり、そこから出土する遺物はすべて戦争遺物として扱われる。

本号で紹介する戦争遺構は、考古学的方法論に則って調査されず、現存しているものも掲載している。

軍事遺跡としての初の国指定史跡「東京湾要塞」(横須賀市)

東京湾要塞とは、明治から昭和前期に首都東京の防衛を目的に設置された砲台群で、陸軍の東京湾要塞司令部が管理し、三浦半島・房総半島に設置された砲台と海堡(人工島)で構成される。

3頁記載の夏島周辺の埋め立ては海軍によって行われたが、明治21、22年には東京湾要塞の沿岸砲台として夏島砲台が陸軍によって建設され、山頂には砲座や観測所が造られた。大正4年に陸軍の防衛御造物除去後は海軍に管理が換り、横須賀海軍航空隊基地造成時に島周辺は大きく削平、太平洋戦争末期には横須賀海軍警備隊の防空砲台として機銃砲台、横須賀海軍航空隊基地の地下壕建設により現在の形状に至る。このように夏島は陸海両方の基地となっていた。

横須賀市にある東京湾砲台の「猿島砲台跡」と「千代ヶ崎砲台跡」の2つの砲台は、「史跡東京湾要塞跡」として2015年に軍事遺跡としては日本で初めての国史跡に指定された。



千代ヶ崎砲台跡 横須賀市教育委員会提供

## 戦争

## 考古学

戦争は考古学を学ぶ者たちにとっても、様々な影響を与えた。夏島隧道の上には縄文時代初頭の貝塚として著名な夏島貝塚がある。夏島貝塚の存在は昭和16年(1941)に桑山龍進によって『人類学雑誌』に紹介され、縄文時代早期の遺跡として周知される。桑山は報告の文末に「出土遺物の一部は隅々工事に携わり某氏により採拾、畏友小笠原義隆氏へ寄贈せられしものにして、(中略)然れども本遺跡及び遺物の貴重なるを認識し、勇躍公務に赴かんとする秋、その発表を筆者に委ねられた」と記している。

小笠原は昭和16年、陸軍に徴兵され、夏島貝塚で採集された資料を桑山に委ねて出征し、昭和18年に中華民国江蘇省阜寧県陳家集において戦死し帰らぬ人となった。小笠原が資料の重要性を認識していたことが、後の明治大学による発掘につながり、夏島貝塚は国指定史跡になる。明治大学による夏島貝塚の発掘は、昭和24年(1949)に米軍将校らが明治大学で日本民族について学んだことが契機となり、昭和25年、昭和30年の発掘調査が実現する。

夏島と隣接し、戦時下では共に追浜飛行場内にあった野島の頂部にも、縄文時代早期の貝塚がある。野島貝塚は防空砲台となったことにより貝層が露出し、瀬戸神社の宮司であった佐野大和が戦後すぐに発見した。



夏島貝塚  
横須賀市教育委員会提供

夏島貝塚の発見者である小笠原は浦郷にある時宗能永寺の副住職で、専攻は考古学ではなかったが、能永寺裏山に貝塚が存在することに気づき赤星直忠の指導の下、数回にわたる発掘調査を行っている。これが榎戸貝塚である。野島貝塚の発見者である佐野大和は國學院で考古学を専攻し、青ヶ台貝塚の発掘や中世遺跡の発掘などを行っている。佐野もまた卒業論文を完成し、「横浜市青ヶ台の石器時代遺跡」をまとめ『古代文化』に投稿中に出征している。坂詰秀一への手紙に「読みさしの本にしをりを挟め征かむ 学ぶ見れにお召しのあらば」と出征心境を詠んでいる。

戦時中、考古学は戦時体制とは無縁でなかった。「皇国史観に積極的に妥協し追従し自らの科学性を犠牲にした研究者も生じた」ともいう。考古学にとっては「沈滞した数年」ともいわれ、また「官」の考古学者は積極的に「外地」(植民地)考古学へと乗り出していった。

夏島、野島の山中は隧道、頂部には砲台などの施設が造られ、戦争遺跡という面を持つ一方で、縄文時代の貝塚としても著名である。戦争という時代の流れに巻き込まれながらも、その頂部にはるか数千年前の貝塚とともに戦争遺構を携え、奇跡的に今なお残る。

中区日ノ出町には1859年(安政6)、福井藩によって建設された太田陣屋があった。ここは横浜における陸上警備の拠点として機能し、1868年(慶応4)の戊辰戦争勃発後は佐賀藩が駐屯、東北線戦で負傷した兵士を治療する病院として活用され、戦争終結後は兵部省の出張所となった。



兵部省が陸軍省と海軍省に分離すると、太田陣屋は陸軍省の管轄となり、神奈川砲台を運用する東京鎮台第3砲隊の兵営となる。しかし、駐屯兵力が縮小すると急速に廃れ、久良岐郡太田村宇霞耕地(現在の三春台、関東学院の場所)との土地交換の話が出、1883年に霞耕地を購入する。その後1885年に横浜大隊区司令部が霞耕地の騎兵営に移転し、常設の部隊が置かれていなかったこの地が神奈川県・山梨県の兵事行政の中心となる。その後、大隊区は連隊区に改称、日露戦争後の軍備拡張により横浜連隊区司令部は甲府に移転する。

兵営(太田陣屋の後身)  
兵部省〇〇の標柱が中央にみえ、明治3~5年とわかる  
横浜開港資料館所蔵

## 舞岡熊之堂遺跡

戸塚区舞岡町・吉田町にまたがる標高約60mの丘陵上から陸軍高射砲第117連隊第3大隊第14中隊の宮根照空隊陣地跡の遺構が検出された。この陣地は北側と南側に分かれ、北には分隊陣地跡、南には中隊本部跡、その間にコの字形の避難施設が見つかった。

照空隊とは読んで字のごとく、飛来する敵機を撃ち落とすために、夜間に空を照らし出す部隊である。照空隊には、「照空灯」という器材を用い敵機を照らし出したり、敵機の音を聞く聴音機などが配備された。照空灯の仕組みは、陰極燈2本の炭素棒に電流を流し、電極間に生じるアーク放電により強い光を生み出し、その光を背面に付けた鏡によって反射させ、前方へ照射するのである。

中隊本部跡では中央2つの部屋と機関砲座を取り囲むようにして、「囲郭施設」と称する幅5m深さ2mもの施設が屈曲しながら陣地を構成する。



炭素棒

中隊本部

照空灯掩体跡

## 横浜に残る陸軍遺構

### 11 宮根照空中隊本部・分隊陣地

### 13 横浜憲兵隊と横浜連隊区司令部

## 野毛周辺の陸軍施設

日中戦争開戦までは横浜憲兵隊のみが市内常設の陸軍部隊であった。1881年東京憲兵隊が設置され、以降全国に拡充され、1894年に横須賀に神奈川憲兵隊、1896年横浜日ノ出町に神奈川分隊が設置、横浜憲兵分隊と改称される。関東大震災後は横浜公園内に仮庁舎を建設、中区宮川町の新庁舎移転後、山下町に移転する。

神奈川県には陸軍の軍事行政を所管する連隊区司令部がなく、招集を受けると甲府の歩兵第49連隊に入営しなければならなかったため、1933年頃から横浜市の政財界は連隊を招致しようとし、太平洋戦争開戦前の軍制改革により、野毛山の老松小学校隣接地に横浜連隊区司令部が開設された。

1941年に防衛総司令部ができると、横浜には独立高射砲第四大隊、東京防空隊独立照空第三大隊、独立高射砲第五、第六中隊から成る横浜地区隊が編成された。野毛山公園内にも2門の高射砲陣地を構築した。戦闘が激化する44年には関東地域の防空態勢は増強され、関東各府県を管轄する高射第一師団が東京で編成され、横浜にはその下の高射第117連隊が編成され、本部は野毛山に置かれた。上記の宮根や池辺の中隊はここに属する。

1934年(昭和9)8月後半  
野毛山における照空灯  
横浜都市発展記念館所蔵

## 敷根不動原遺跡

都筑区池辺の河岸段丘平地地を利用した敷根不動原遺跡でも、陸軍高射砲第117連隊第3大隊第15中隊の池辺照空分隊陣地の兵舎跡が検出されている。兵舎とみられる建物は、3間×8間の側柱式の建物で南側1間分張り出しを持ち、北側もその可能性がある。柱は凝灰岩の割栗石の礎石の上に据えられている。

兵舎付近の土坑などからは統制陶器や罫子などが出土している。統制陶器とは、陶磁器製造業者が当時の商工省(現:経済産業省)による統制を受けており、製造者番号が振られた陶磁器製品のことである。昭和16年から20年までの時期にみられる。出土遺物は星章や緑色の圏線があり、陸軍の兵隊用の飲食器であることがわかる。



統制陶器

兵舎跡

### 14

## 陸軍兵器補給廠田奈部隊

緑区奈良町にある「こどもの国」は田奈部隊と呼ばれた陸軍兵器廠の跡地である。現在レクリエーション施設「こどもの国」として、約100ha(約30万坪)もの広大な敷地に、広場やプール、スケート施設、ミニSLなど様々な遊び場をもつこの施設は、東京陸軍兵器補給廠田奈部隊填塹所だった。

東京都北区十条にあった東京第一陸軍造兵廠の弾薬製造業務拡大のため、1941年に造られた。ここが選定されたのには、東京に近く、海岸から適度に離れ、秘密を保ちやすく、また掌を開いたような谷地形が弾薬を低温保存したりと火薬を扱う諸施設を作るのに適していたからと言われている。填塹とは弾薬の組み込み作業のことで、この施設では各地から集めた火薬を使い、高射砲、野戦砲、手榴弾、小銃などの弾薬を製造した。当時は33か所の弾薬庫があったが、現存するのは10か所である。



半円窓式弾薬貯蔵庫

## 10 太田陣屋と横浜大隊区司令部

戸塚にあった競馬場

戸塚駅東口前には、かつて競馬場があった。大正末期には県内8か所地方競馬が施行されていたが、1927年(昭和2)に地方競馬規則により、神奈川県畜産組合連合会が競馬を開催し、県内競馬場は4か所に制限。その後さらに2か所に限定され、1932年(昭和7)に川崎市に川崎競馬場、翌1933年に戸塚町吉田に戸塚競馬場が竣工する。

戸塚競馬場は走路1600m、幅30mの田畑を埋めて造成した∞型のコースで、コース内側はもとの田畑のまま利用した。毎年春と秋に競馬が開催され、かなり人気があり、1934年3月では4日間で20万人余りの人出があったようである。

こうした地方競馬以外にも、小規模な競馬が明治、大正時代に村社を介した娯楽行事の一つとして行われていた。港南区釜利谷地区では、「ウマカケ」として、現在のNHK円海山無線中継所をカケダシ(出発点)に、西方に伸びた直線状の尾根がコースで、トメバ(終点)までの300mを近郷の農耕馬が競った。

軍馬の育成

日中戦争から太平洋戦争へと進む中、軍馬の補充育成のために1940年(昭和15)には競馬は鍛錬場競争へと変わる。戸塚競馬場は1942年(昭和17)に吉田町から汲沢町に移転する。この競馬場は走路1000m、幅25mの馬場が設けられ、馬匹組合連合会の運営のもと、鍛錬場競争が施行され、1944年まで行われた。戸塚競馬場が元あった吉田町の跡地は日本光学工場となる。

終戦後は一時ヤミ競馬が行われるが、地方競馬法が施行され、正式な法規のもとに競馬が開催され、1948年には県営及び市営での委託開催となる。1949年には川崎に新しい競馬場が竣工し、立地条件の悪かった戸塚競馬場は1950年10月の開催が最後となる。1954年には全面廃止が決定し、跡地には横浜市立戸塚高等学校や汲沢団地ができる。移転後日本光学の工場となっていた吉田町の旧戸塚競馬場跡地は終戦後米軍に接収され、戸塚PX等となるが、その後日立横浜工場や東戸塚小学校が建てられた。



戸塚競馬場 a 畜産共進会会場 b 戸塚駅東口(昭和14~15年)競馬場降りの人で賑わう(汲沢町) c 写真提供:坂本写真

横浜に残る軍需工場跡

日中戦争の勃発以降、資金や物資、労働力を軍需産業に動員するために、統制経済の色彩が強まっていく。横浜でも京浜工業地帯をはじめ、各区に工場が建設され、特に神奈川県は規模の大きな機械器具工場が増加した。

横浜市内をみると、金沢区には大日本兵器会社富岡兵器製作所(谷津町)、日本製鋼所横浜製作所(泥亀町)、日本飛行機会社横浜工場(富岡町)、石川島航空機工業会社富岡製作所(富岡町)など海軍と関係の深い兵器関連企業が進出し、村の3割以上が工場であったところもある。旧戸塚区(鎌倉郡)でも日立製作所戸塚

工場(戸塚区戸塚町)、日本火工戸塚作業所(泉区新橋町)、芝浦製作所大船工場(栄区笠間町)、日本光学工業戸塚工場(吉田町)、大日本兵器会社(瀬谷区南台)など兵器関連企業の進出が相次ぐ。

従来から重工業企業の集中する鶴見区や神奈川区等の京浜工業地帯以外にも各区に軍需産業関連の工場が造られていく。金沢区は追浜飛行場が出来たことに関連、旧戸塚区への工場進出は、京浜の大消費地に近く、鉄道や国道などの輸送の便、また安く広い土地が得られたことによる。

軍用爆薬カーリット

保土ヶ谷区にも工場が進出し、天王町にあった保土ヶ谷曹達工場では電解苛性ソーダ製造が行われていた。また仏向町では、浅野カーリット保土ヶ谷工場軍用爆薬カーリットが製造された。カーリット(Carlit)とは、過塩素酸アンモニウムを酸化剤とし、ケイ素と木粉を燃焼剤とする爆薬である。セメントで有名な浅野財閥の浅野総一郎が起ちた会社であり、1916年にスウェーデンのカーリット社から日本における製造販売権を取得、研究開発を始めた。

保土ヶ谷工場は1995年まで稼働し、その跡地は2011年にたちばなの丘、市沢市民の森公園として一部開放されており、煉瓦造やモルタル塗りの当時の工室や隧道、トロッコ用のレール、万年塀などが遺されている。



「工室」と呼ばれる火薬類を製造する建物や火薬庫の周囲は土塁で囲われ、b~fはその土塁の出入り口となるトンネル部分。トンネル内にも退避場となる空間がある。保存された8本のトンネルのうち、7本がレンガ造、1本がコンクリート造。トンネルの坑門には工室での製造工程を示す記号がある。

- a 万年塀 (鉄筋コンクリート組立塀)
- b 導線工室 (DF)
- c 包装収函工室 (H)
- d 第九爆薬工室 (9T)
- e 第四混和工室 (4K)
- f 尾根道下隧道



横浜市港北ニュータウン地域のけんか山遺跡からは、焼夷弾の一部がみつかっています。小型焼夷弾M69集束弾E46等のノーズブロックと言われる親爆弾頭部の重りです。

港北NT発掘調査の中で

参考図書

神奈川県立金沢文庫 2003 『目で見える近代の金沢』  
 神奈川県立金沢文庫 2011 『大横須賀と金沢』  
 神奈川県立歴史博物館 2015 『陸にあがった海軍 連合艦隊司令部日吉地下壕からみた太平洋戦争』  
 菊田清一 2002 『第一海軍燃料廠とその周辺の戦争遺跡』  
 栗原清一 1928 『横浜の史蹟と名勝』 横浜郷土史研究会  
 公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター 2016 『上行寺裏遺跡(瀬戸21番地やぐら群)発掘調査報告書』  
 公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター 2021 『洲川島遺跡(本町六丁目~北仲通六丁目地区)資料集』  
 公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター 2022 『シリーズ横浜の遺跡vol.1 横浜市戸塚区舞岡野聖堂の戦争遺跡-太平洋戦争末期の航空隊陣地の発掘-』  
 財団法人横浜市ふるさと歴史財団 2000 『金沢区No.52(上行寺裏)遺跡-平成9・10年度範囲確認調査報告書-』  
 坂詰秀一 1997 『太平洋戦争と考古学』  
 佐野大和 1975 『特殊潜航艇』  
 藪根不動原遺跡調査団 2007 『藪根不動原遺跡』  
 横浜金沢の戦跡を調査する会 2012 『横浜金沢の戦跡』  
 横浜市教育委員会 2013 『(仮称)日吉5丁目開発地【航空本部等地下壕】工事立会調査報告書』  
 横浜市総務局市史編纂室 『横浜歴史』II 第1巻(下)

※この他にも「市史通信」や「開港のひろば」にも横浜市内の戦跡関連に内容が公開されています。

戦争とウマ

日本人のウマ利用

日本人とウマとの関係は、他の家畜と比べると、そう長くない。縄文時代や弥生時代の遺跡からウマの骨は出土せず、現在日本で確認されている最古のウマの出土事例は、山梨県甲府市塩部遺跡の4C後半のものとしてされている。その他、馬具などの出土事例からも、日本への馬の導入は概ね5C、そして古墳時代後期の6Cになると急増する。ウマと共に馬育成技術を持つ人も来て、徐々に増えていったとみられている。ここに乗馬の風習もみられるわけだが、中世などでは戦闘に使用する荒々しいウマを武將

が好んだようである。このため、馬牧で名馬を生産してもすぐに乗馬はできず、一定期間の調教・馴致が必要であった。

日本馬の体高

日本の在来馬の体高は古墳時代から江戸時代まで大体120~140cmの間にある。14ハンド2インチ(約148cm)以下がゴニー、150~160cmほどが競走馬として知られるサラブレッド、大きい馬は170cm近くというから、日本の在来馬の大きさは西洋のものに比べると小型であった。江戸時代になり体高135cmをこえるような在来馬の中では大型の個体が増加するものの、西洋の馬の大きさにには及ばない。

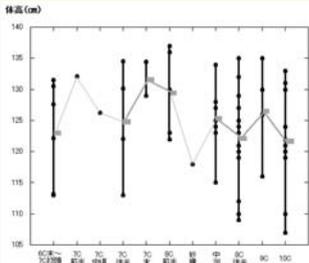
軍馬政策

明治初期においてもその傾向は変わらず、近代軍隊における軍馬としては資質を欠いていた。日清・日露戦争を経て実践上で痛感した日本軍は、優れた軍馬を大量に確保することが大陸への軍事的進出に向け急務とした。これは、自動車の運用が困難な悪路の多さ(特に中国戦線)、自動車工業の未発達、燃料資源の不足等が背景にあった。

このため日本馬全体を軍馬資源化とする馬政計画が打出され、国内馬3分の1に洋種血統を導入することや国防と産業の双方に適したウマの造成が目標とされた。

競馬と日本人

日本における近代競馬の始まりは諸説あるが、1861年(文久元)に横浜の居留外国人によって洲川干天社裏の西岸埋立て地で行われたのが最初とされる。1867年(慶応3)、横浜レース倶楽部が根岸競馬を開催し、1880(明治13)には横浜ジョッキークラブと改称される。日清・日露戦争を経て、日本馬が欧米産馬に比べ劣るとされ、ウマの改良手段として競馬が目目される。1906年(明治39)に馬政局が設置されると、政府黙認のもと、馬券販売を伴う競馬の開催が実施された。しかし、八百長などの事件が度々起こり、明治41年には新刑法の施行と共に、馬券の販売は禁止される。各競馬会は競馬倶楽部へ知りされ、補助金によって細々と続いていたが、明治43年には馬政局が陸軍省へ移され、大正12年になり、ようやく成立した競馬法により、馬券販売が認可された。



古代における日本馬の体高分布図 西本・金・浪形 2010 「観音寺遺跡6区南環状道路地点出土の動物遺体」(観音寺遺跡川)